

豊岡市下鶴井付近の 数種のチョウ 足立 義弘

このレポートを書くにあたり、当初は、豊岡市下鶴井で採集した
今迄の記録をまとめようと考えた。しかし、標本がすべて手元にな
く、正確を欠いた報告となることを避けるため、現在手元にある、
1975年の採集記録をもとに、その中から特記すべきと思われるもの
についてののみまとめることにした。単なる記録報告としてよりも、
むしろ今後の課題、あるいは今後の活動の中にひとつの方向性をも
たらしめるものとなるよう書き進めたい。

下鶴井は豊岡駅より直線で北へ約6キロ、円山川の東側に位置し、
200メートル前後の山に囲まれた谷沿いにある。近くには赤石、山
道を北へ抜けると結、また東北寄りに抜けると飯谷、畑上などの集
落がある(図1)。このルートは、昔豊岡方面への主要ルートとして利
用されていたと聞いたことがある。

採集ルートは、AからEまで次のように分けた(図1参照)。

- A 下鶴井よりBを途中で果へ行くコース。
- B 下鶴井より峠を経て飯谷へのコース。
- C 下鶴井より尾根を経てDへ出るコース。
- D 飯谷からEへ出、結へ抜けるコース。
- E 赤石から結へのコース。

各コースの採集回数は、D5回、E2回、DからEへ3回。A、
B、Cのコースは非常に頻繁に出かけたので、特に回数を記録して
いない。採集をおこなった期間は、1975年の3月下旬から7月上旬
にかけてである。

次に植生について簡単に述べる。調査地を、下部(コースAとB、
Cの下鶴井側より3分の1)、中部(B・Cの残り3分の2)、および上
部(Dと、DからEの結側)に分けると、下部には畑地が多く、杉
の植林、伐採後放置された陽地、竹林、クリ・コナラ・ヌルデなどの固
木、部分的にヤブツバキの混じった雑木林などがある。中部にはク
リ・コナラ・クヌギを中心に、マンサクなどが部分的にはえている。尾

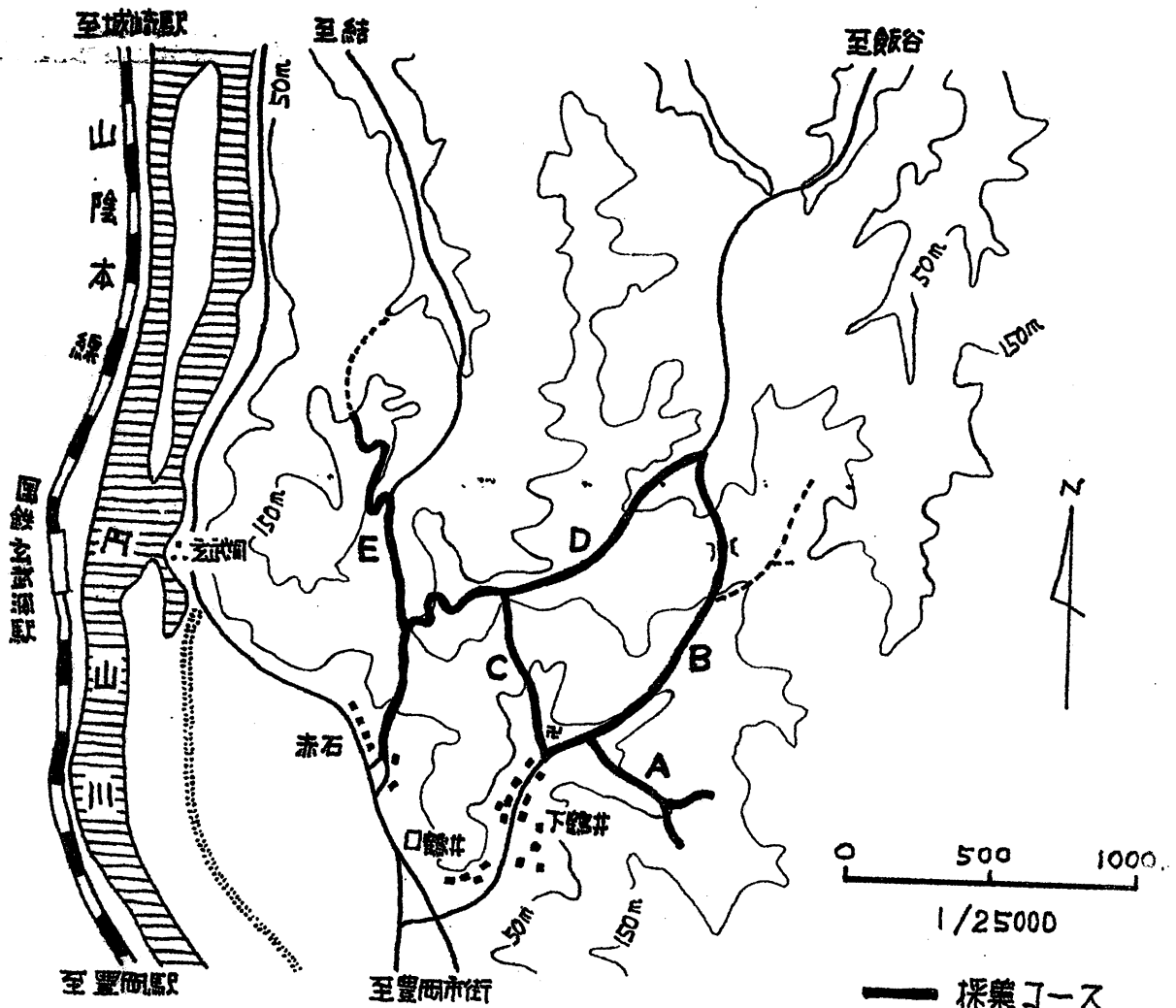


図1 調査地の概略図(豊岡市下鶴井周辺)

A~Eは本文中

根のやせ地にはソヨゴ、ツツジ科の低木が目立つ。山道沿いには杉の植林が多く、伐採地も目立つ。伐採後、ヌルデ、ウツギの類、部分的にノイバラなどが茂っている。上部は、尾根筋にアカマツの林、ツツジ、ソヨゴ、コナラの小木。尾根筋以外にはコナラ、マンサク、クリ、部分的にクヌギなど落葉広葉樹がほとんどを占めている。全体的に高木といえるほどの樹木は少ない。他に、下鶴井側にはナシブドウ園があり、結側にはクリ園がある。大雑把ではあるが、豊岡付近では比較的普通の植物相をもった地域と思われる。

以下に採集観察した数種のチョウについて報告する。

1 スジボソヤマキチョウ (*Gonepteryx aspasia*)

1975年最初の記録はスジボソヤマキチョウであった。3月29日各1をBからAへの分岐点で採集した。この日はまだ谷間に少し雪が残っており、採集したのは寺の雑木林、杉林、竹林に囲まれた

畑地であった。今と早は絡み合うように交尾したまま飛んでいた。^{*}翅の裏面には黒っぽい汚点が目立ち、鱗粉はかなりはげていたが、今と早の色の違いは認められた。3月29日という早春の時期に、越冬後の個体によってなされていた交尾をもう少し冷静に観察しておけば良かったと、残念に思っている。

2 ギフチョウ (*Luehdorfia japonica*)

4月15日晴れ、14時過ぎ、Dの中間地点にてギフチョウを目撃した。1~2メートルほどの高さを保って飛翔し、ときどき付近の常緑広葉樹の葉に止まったりした。かなり活発に行動しており、2~3分で見失ってしまった。付近は、山を焼いた跡に1メートルほどの杉の植林してある、かなり広い陽地であった。食草らしきものは発見できなかった。なお、下鶴井での記録は、1974年5月4日、Aのコースで早1がある。

3 ウラクロシジミ (*Iratsume orseice*)

5月15日、ウラクロシジミの前蛹を採集した。採集地はCのコースの下鶴井側から3分の2ほどの地点(標高約100メートル)。伐採された斜面を2~3メートル林内に入ったところで、マンサクの葉裏にワジ状の幼虫を見つけた。幼虫のいた葉の高さは地上2メートルくらいで、葉脈に沿って静止しており、帯糸を掛けていた。枝ごと持ちかえり、ガラス容器に入れて直射日光の当たらないところに置いた。

5月17日、ややヒョウタン型ともいえる蛹となる。色はライトグリーン。

5月25日、翅の部分がやや乳白色を帯びる。

5月26日、翅の乳白色の部分がほとんど白色となる。

5月31日、翅が茶褐色を帯び、少しずつ黒くなっていく。他の部分は褐色を帯びていた。

6月1日、羽化。残念ながら羽化の瞬間を観察することはできなかった。9時30分には既に翅は伸びきっており、腹部もスマートになっていた。早朝に羽化したものと思われる。

4 ウラキンシジミ (*Ussuriana stygiana*)・ウラクロシジミ

6月15日、ウラキンシジミ、ウラクロシジミを採集した。

* 原色日本昆虫生態図鑑 III. チョウ類 (福田ら, 1972)によれば、この種の交尾は越冬後になされるという報告があるが、著者の田中は羽化直後6~7月にしばしば交尾を観察しており、越冬後の交尾は観察していないという。

ウラキンシジミの採集地は、EのコースとDのコースの交差点（標高約130メートル）。日当たりの良いコナラの葉上にいたものを採集。時間は16時、晴れていて、付近はクリ、コナラ、マンサクなどよりなる雑木林で、樹高は全体的に低く4~5メートル程度。食樹であるトネリコタシキものは見当たらなかった。

ウラクロシジミは、ウラキンシジミの採集地点からDを東へ200メートルほど行ったところで採集された。付近の樹木はマンサクを中心にコナラ、アカマツなどが主なもので、全体的に見通しの良いところであった。各早各4個体をマンサクの葉上で採集した。各の個体（採集個体と同一かは、樹木の陰になって観察できなかったもので確信はできない）は占有行動を示し、2~4分の間隔をおいて同じマンサクの葉上を訪れており、ほとんど林内に入ることなく樹木を巡回していた（そのマンサク葉上で採集）。他の各個体が近づくと、追飛行動をとり、追いまわしたり絡み合うような飛び方をした。谷の下方には10~15メートルほどの樹木のまわりを巡回しているものを3~4個体目撃した。すべて各であった。さらに、この他にも2~3個体が見え隠れしながら占有性を示していた。各の採集時刻は18時過ぎである。早は各のように飛び回っており、マンサクの樹葉をネットでたたくと飛びだし、30秒ほど樹間を巡回して5メートルほど隔ったマンサクの葉上に止まった。各のような占有行動は観察していない。早はこの個体しか見かけなかった。早の採集時刻は18時30分。採集地点の標高約140メートル。

なお、この日は他のゼフィルスは目撃しなかった。

以上の他にも、1975年5月15日にはDのコースでタニウツギの花に飛来していたアサギマダラ（*Parantica sita*）を目撃したこともあり、今後の調査によってゼフィルスをはじめとして、より多くの種が下鶴井付近に生息していることが明らかになるであろう。

しかしながら、近年下鶴井付近も著しく変わりつつある。次第に山の奥へと広がっていくクリ園、至る所に土砂崩れの跡を残してつくられた林道、そして土砂に埋もれた樹木や倒れた大木。このような急激な植生の変化は、まわりの昆虫相にどのような影響を与えていくのだろうか？まわりの自然は常にこのような危機に曝されているのである。このような危機感の下で今後の活動を続けなくてはならないということは、皮肉なことと思える。とともに、あせりともどかしさを感じる次第である。